



Title	第7回 ウィリアム・モリス研究会
Author(s)	
Citation	デザイン理論. 2023, 82, p. 44-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92371
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第7回 ウィリアム・モリス研究会

日時：2022 年 12 月 17 日（土）13：00-16：40

場所：オンライン

主催：意匠学会 担当：大阪大学

本研究会は、意匠学会の分科会で、ウィリアム・モリスに関連する研究をめぐって学術的な議論をかわすことを目的としています。オンライン開催にあたっては、モリス研究に関心のあるかたを対象として、登録すれば誰でも参加できるとしたところ、52 名の申し込みがあり、最大で約 55 名の参加がありました。大学関係以外の参加者も多くみられました。

研究会ではとくに①モリスと自然保護思想 ②ラスキン&モリスのアジアへの影響 ③ 19 世紀の社会改革運動思想とその意義について、関心が深まったように感じられました。今回の研究会ではまた、モリス理解の広がりにも注目しようと、studio-L の吉田氏に大阪ラスキン・モリスセンターのリニューアル計画について報告いただきました。

ウィリアム・モリスは優れた詩人であったほか、工芸家・文筆家・活動家として多彩な能力を発揮した人物でした。したがって、モリスの仕事をめぐって意見を交わすことで、現代人の視野を広げることできるでしょう。自分の期待していなかったモリスに出会うことこそ、この研究会において大いに意味があると思いました。

高安啓介（大阪大学）

プログラム

13：00-13：05 開会の言葉 藤田治彦

第 1 部：美をめぐる思想 司会：高安啓介

13：05-13：35 自然との共生を目指して ― ウィリアム・モリスとエピングの森
江澤美月 | 一橋大学

13：35-14：05 ウィリアム・モリスを批判のフランク・ロイド・ライトと柳宗悦
― 20 世紀の活動と 21 世紀初頭の現状
藤田治彦 | 大阪大学

14：05-14：35 ロエベ・ジョナサン・アンダーソンのクリエーションからみるモリス思想
鈴木園子 | 慶應義塾大学大学院在学

第2部 ソーシャルな次元 司会：吉村典子

15：00-15：30 社会デザインの起点としてのモリスの労働観
高安啓介 | 大阪大学

15：30-16：00 ヴィクトリア朝の子供の貧困と Industrial Schools Act
—— モリス商会の年少者雇用
横山千晶 | 慶應義塾大学

16：00-16：10 話題：大阪ラスキン・モリスセンターのリニューアルの取り組み

16：10-16：30 懇談：モリスとラスキンの研究のこれから

16：30-16：40 閉会の言葉 川端康雄

【発表1】

自然との共生を目指して —— ウィリアム・モリスとエピングの森

江澤美月 | 一橋大学

ロンドン北東部エセックス州に位置するエピングの森は、モリスにとって少年期に時を過ごした思い出の場所である。この森は1878年から百年ほどの間に複雑な植物相から単純な植物相に変化したことが指摘されている。1878年は、エピングの森法が制定され、森がロンドン市の管轄になった年であり、モリスが森の保護に尽力したのは、この百年の最初の頃である。モリスは、1895年の4月上旬から5月上旬にかけて、エピングの森の保護のために、『デイリー・クロニクル (Daily Chronicle)』紙の編集者宛てに三通の書簡を公開した。この時彼は親しい友人のフィリップ・ウェブやフレデリック・スタートリッジ・エリス、シドニー・コッカレルと共に、実際現地に足を運んでいる。しかし、三通目の公開書簡を最後に、モリスはエピングの森を訪れることも発言することもなく翌年死去した。この三通目の手紙でモリスは、当時の御猟場管理官であったエドワード・ノース・バクストンの著書『エピングの森 (Epping Forest)』(1885)からの引用を行っているが、同書は1878年のエピングの森法の制定から百年たった1978年に、初期の保存論者が依拠した本として注目された本である。

モリスは機械化から脱することで、また古建築保護協会の活動を通して環境に配慮したことが論じられる。一方で、彼が行ったエピングの森保護活動は論じられることが少ないようである。今回の調査で、モリスの公開書簡に先立ち『タイムズ (The Times)』紙でエピングの森の木の伐採について議論が交わされていること、またバクストンがモリスを批判していることがわかった。本発表ではまず、モリスが『デイリー・クロニクル』で発言する前のエピングの森の状況を概観した後、モリスの発言で問題点を確認する。次に、『タイムズ』紙で展開されたエピングの森に関する議論を確認し、最後に再びモリスの発言に戻り、その意義を検証する。

【発表 2】

ウィリアム・モリスを批判のフランク・ロイド・ライトと柳宗悦

— 20 世紀の活動と 21 世紀初頭の現状

藤田治彦 | 大阪大学

1901 年 3 月にアメリカの建築家フランク・ロイド・ライト (1867-1959) が、シカゴのアーツ・アンド・クラフツ協会での講演「機械のアートとクラフト」で、ジョン・ラスキンと特にウィリアム・モリスに触れて批判したように、柳宗悦 (1889-1961) も 1927 年 (昭和 2 年) の「工藝の道」でラスキンとモリスについても詳しく触れていた。そこでラスキンとモリスを「工藝美論の先駆者」としたが、柳も両者を批判していた。但し、ライトと柳の批判の内容は異なる。ライトは機械を重視し、機械を軽視し疑問視するモリスやラスキンを批判したのに対し、柳はモリスらのアーツ・アンド・クラフツ運動は、手工芸ではなく、産業手工芸であることなどを批判していた。柳の本格的な活動開始は、バウハウスでのデザイン教育の始まりの時代だったが、柳はむしろ手工芸や民藝を重視していた。

第二次世界大戦後の 1952 年 7 月、イギリス南西部デヴォン州でのダーティントン国際工芸家会議に参加した敗戦国の柳と濱田庄司 (1894-1978) には、西洋各地から参加の人々も注目していた。第二次大戦は航空母艦や多数の戦闘機使用の機械の世界大戦だったが、大戦終了後、日本だけでなく西洋の人々も手工芸に再び注目したとも言える。20 世紀半ばのアメリカの建築家で代表的なデザイナー、チャールズ・イームズ (1907-1978) は手工芸にも興味を持ち、日本の和室にも注目、力を入れた工業デザインや映像等だけでなく世界各地のクラフト等も大切にした。

ライトの「機械のアートとクラフト」講演の百年後、2001 年 3 月に同じシカゴで国際会議が、柳と濱田が参加したバーナード・リーチ (1887-1979) らが開催のダーティントン国際工芸家会議の五十年後、2002 年の同じ 7 月に、やはりダーティントンで国際会議が再び開催された。1990 年から開設のダーティントン芸術大学は 2010 年に閉鎖されていたが、2022 年から再設立の可能性もある。この教育機関は、美術や工芸だけでなく、音楽や演劇等も含む、総合的な芸術大学であった。

【発表 3】

ロエベ・ジョナサン・アンダーソンのクリエイションからみるモリス思想

鈴木園子 | 慶應義塾大学大学院在学

第 4 次産業革命はインターネット前提の革命であり、手にとれない人やものとのコミュニケーションの中で私たちは現在を生活している。そのような時代において 18 世紀から 19 世紀に発生した第 1 次産業革命下でウィリアム・モリスが大量生産の粗悪なものの作りに対抗し行った手仕事の重要性を唱えるアーツ&クラフツ運動に着目しその精神をブランドの着想源として採用した一人のデザイナーがいる。

スペインで 1846 年に誕生したラグジュアリーブランド、ロエベのクリエイティブディレクター、ジョナサン・アンダーソンである。彼は 1984 年に北アイルランドで生まれた。幼い頃から彼は祖父の影響でクラフトを愛でて生活をしてきた。時間をかけて丁寧に作られたクラフトの美しさに慣れ親しんでいた。2013 年にロエベに参画し、ブランドの根幹であるクラフトマンシップに着目し、モリスの思想を採用し現代の文脈に繋げブランドを再生させた。現在ロエベのブティックには、クリストファー・ドレッ

サーのガラスなどアーツ&クラフト運動に深い関わりを持つアーティストの作品をおかれている。2017年秋冬カプセルコレクションではモリスのデザインを用いたものを発表。2018年にはチャールズ・レニー・マッキントッシュ、2019年にはウィリアム・ドゥ・モーガン、そして2021年にはチャールズ・ヴォーシーのデザインを同コレクションで採用した。また積極的にイギリス人の現代美術家、アンセア・ハミルトンやヒラリー・ロイドともコラボレーションを行っている。着目すべきはイギリス人のアーティストとコラボレーションという手法によって新たなクリエーションを探索している点である。この手法も初期のモリス商会からの着想でないかと考えられる。

本研究ではジョナサン・アンダーソンの言葉を紡ぎながら今までに発表されたコレクションを参照し、ロエベのブランド再生の背景にはどのようなモリスの思想があり、どのような形でコレクションや制作物の中に反映されているのかを考察する。

【発表4】

社会デザインの起点としてのモリスの労働観

高安啓介 | 大阪大学

ソーシャルデザインとして知られる活動をここでは社会デザインと呼ぶ。社会デザインの自覚が高まるのは、20世紀後半になって商業デザインの負の側面が目立つにつれて、デザイナーの社会責任がますます問われてからだろう。社会デザインはそのため、従来から商業デザインとの違いを意識しており、商業デザインが解決しえない問題に取り組むとみられてきた。これまで、社会デザインへの関心の高まりとともに、問題解決のための方法論や、取り組み事例の紹介は多くみられたが、社会デザインの歩んできた歴史はあまり語られなかった。ラスキンといった先人の仕事が引き合いに出されても、社会デザインがどう展開してきたかの認識はまだ十分には得られていない。

本発表では、社会デザインの発展の三段階モデルを提示して、ウィリアム・モリスがどのように位置づけられるのかをしめしたい。基本となるのは、次の見立てである。第一の段階は、労働のありかたを見直しながら、美しいものを生み出そうとする段階であり、社会に配慮しようとする段階である。第二の段階は、消費のありかたを見直しながら、必要なものを生み出そうとする段階であり、社会に貢献しようとする段階である。第三の段階は、社会のありかたを見直して、人と人との関係を生み出そうとする段階であり、社会を創造しようとする段階である。

社会デザインの第一の段階としてモリスに注目するのは、かれが美しい品々が生み出される社会条件をととのえる必要を感じて、1880年代になって社会主義運動にかかわり、労働問題について多くの講演をおこない多くの文章を残したからである。モリスはそのなかで二つの希望を見出している。一方のそれは、喜ばしい労働によって喜ばしい芸術がもたらされる可能性であり、他方のそれは、喜ばしい芸術によって喜ばしい労働がうながされる可能性である。本発表では、混同されがちなこの二つの議論の違いを意識しながら、モリスの労働観をあきらかにする。

【発表 5】

ヴィクトリア朝の子供の貧困と Industrial Schools Act — モリス商会の年少者雇用

横山千晶 | 慶應義塾大学

ヴィクトリア朝の社会問題の一つは格差と貧困問題であった。特に子供の貧困と少年犯罪は大都市における課題であり、その根源の緩和と対策に多くの民間団体が奔走し、やがて貧困状態にある子供たちの教育制度の設立につながっていく。この動きから法律の制定が促されることとなったのである。嚆矢となったのは、少年犯罪者の矯正のために 1841 年にアバディーンで設立された Boys' Industrial Feeding School である。この動きはイングランドやウェールズにも広がり、1854 年に制定された Youthful Offenders Act (Reformatory Schools Act) により、国家は少年・少女犯罪者の矯正・教育を目指していく。続いて国のターゲットは、14 歳以下の少年・少女犯罪の予備軍に移った。こうして、1857 年の Industrial Schools Bill (Act) が可決されることになったのである。この法律のもとに 7 歳から 14 歳までの子供たちに衣食住の生活環境を提供しながら、基礎的な教育と職業訓練を身に着けさせることを目的とした Industrial School が組織化されていくことになる。

1861 年にこの法律の改正案が施行された年の春にモリス商会は設立されており、その年の終わりまでに 1857 年の法律制定後、ロンドンで最初の認定校のひとつとなったユーストン・ロード 44 番の Industrial School から数名の少年たちを雇い入れることになった。

本発表では、1857 年の法律に至るまでの慈善活動に、ユーストン・ロード 44 番の Industrial School 設立者、George William Bell がどのようにかかわっていたのか。そしてその動きがどのように施設の設立につながったのかを跡付ける。そして 1857 年の Industrial Schools Act と 1861 年の改正案がモリス商会の雇用にどのように関係したのかを考察する。

発表募集

研究会は、毎年 12 月に開催されてきました。意匠学会の会員には 10 月くらいに発表募集があります。ジョン・ラスキンおよびウィリアム・モリスに関連するご研究の成果を発表できます。意匠学会員でなくても発表できますが、800 字程度の発表要旨にもとづいて、学会の担当委員による審査によって発表の可否が決まります。

高安啓介（大阪大学）